

新しい競技規則（ELVs）

ELVs（Experimental Law Variations）が2008年8月1日から施行されるようになりました。
競技規則改正の試みについては、2000年を迎えるミレニアムルール改正時において話し合われ、徐々に検討されることになっていました。これについてはインターネット上でiRBの動きを紹介しましたが復習しましょう。

We are looking at the game in a new light with the idea of making it simpler and easier to play and referee, and to ensure Rugby is understood and enjoyed by the increasing number of spectators that are being attracted to the game.

以上の主旨のもとにiRBの委員会で検討を重ねられ、一方世界の各地で新しい規則規則による試合が実施されてきました。

ラグビーの競技規則の基本原則は3つで不変のものです。

1. EQUAL CONDITION （双方平等公平）
2. OPEN PLAY （オープンプレーの展開継続）
3. SAFETY （安全）

この度の改正もこれらの原則に従いその精神を生かしたものです。

スクラムとラインアウトにボールを投入するプレーヤーの相手側対照プレーヤーは常に対応的（equal）であるように保証されます。

22mラインまで後退してタッチキックをすることについては、規定された時から問題になり、そのようなことを考えるプレーヤーはいないだろうという結論でしたが、今日まで増加しても減る傾向がみられなかったための改正です。

モールで相手を引き倒す（pull it down）ことによる防御ができるように改正されました。モールはぐっと支える以外に正当な防御方法が無かったのです。モールを崩すこと（17.2.e must not collapse）は反則です。モールはボールを持っているプレーヤーが相手側に捕らえられ、味方ボールキャリアにバインドしているときに発生するのです。前進しようとするプレーヤーをスマザータックルのように倒す方法が当然認められるべきだったのですが、立ってプレーをするという原理から前進攻撃側のことが中心にかんがえられてきました。引き倒すことができる（Players are able to pull it down）という文字は、一般的にできると許可を与えるmayではなく真理に沿った当然のものという精神です。

それはequal conditionに沿い、ただらしたモールの連続を防ぎopen playを促すものです。

スクラムにおけるオフサイドラインの改正は、ゲインラインとタックルラインの関係の整理で、アタックラインとディフェンスラインの中間がタックルラインという想定では、前進後退の利益の境界であるボールの位置の線（アドバンテージライン）より後方となる不合理が指摘されて来ました。オフサイドラインが最後尾の線より5m後方にする事によって攻防のラインのバランスが保たれて攻撃側の選択肢が増えますから、これもequal conditionに沿いopen playとその継続を促すものです。

他にいくつかありますが、注意を要するのは以上です。プレーの面から言いましたが、レフリングの面からも笛を吹きやすくなったことは明確です。肝心なことはプレーヤーもレフリーも改正の精神をよく体して、その精神・意図がいきるようになることです。

2008. 05. 07
西川 義行